

人生派の英語

“私の英語”という題でなにか書くようにということだが、英語とのつきあいは随分長いのに、いっこうに進歩しない自分の英語を考えると、“私の英語”などと言って披露するようなものは、とても持ちあわせてはいない。それで以下“私と英語”の関係の一端を申し述べて責めをふさぐことにしたい。話が個人的なことになって恐縮だが、お許しねがいたい。

私の英語の勉強は、多くの人がそうであるように、中学（といっても旧制の）入学のときに始まったが、それから今日まで30年余、だいたいとぎれることなく続いている。大戦中英語が敵性語として排撃されていたときも、私はなにを思ったか吉田松陰の評伝一冊と、英和辞典一冊を持って軍隊にはいった。きびしく叱られたが、“吉田松陰”のおかげで辛うじて没収をまぬがれ、検閲済の印を捺されたこのポケット辞書は、戦後ながくボロボロになって捨てられるまで、私の愛用するところとなった。

私は個人的な理由に戦中戦後の混乱も重なって、正規の学校教育を受ける機会がほとんどなかったのも、英語もいわば独学だが、たった1年だけ“英語を習った”経験がある。それは英語に初めて接した中学1年のときで、本当に英語を教えてもらったのはあとにもさきにもこの時だけである。大戦前夜すでに反米英の気運がただよう学び舎であったが、オーラルで行なわれた初めての英語の勉強のなんと楽しかったことか。一日一日と私の全く知らない新しい世界が目の前に開けていくような気がして、なんとも言えない精神の高まりを覚えたことを記憶している。おそらくこの感動が、愛国の至情に動かされて帝国海軍に志願した少年兵に、英語の辞書を携行させたのであろう。ところでこれと同じ感動を、私はそれからずっとあと初めてキリスト教に接したときにも経験したが、“言”を媒介にして“もう一つの世界”に開眼するという点では、言語と信仰の間に深い同質性があるのだと思う。

戦争が終って復員してくると、世はあげて英語ブーム、猫も杓子も平河唯一先生の“カム・カム・エブリボデー”であった。私も人並みに英語をやらねばと思いたち、焼けビルで始まった日米会話学院に入学し、わずかの間だが、おとなにまじって米軍将校に会話を習い、小林光先生に英作文を教えていただいたりした。それから英文タイプを覚え、運よく外務省文書課にタイピストの職を得て、英語との絆は一層強くなった。役所には英語をはじめとする語学講習会がいくつもあったし、職場全体がなにか学校のようにであった。私は勉強のためにわざわざ難かしい原稿をえらんでタイプをしたり、講習会ではJespersenのGrammarの講義を聞き、親切な上司にフランス語の手ほどきを受けたりした。創刊されたばかりの英字新聞を、わずかタブロイド版4ページではあったが、毎日たんねんに広告の一字一句まで必ず目を通すという宿題を自らに課し、ねむい目をこすりながら1年間続けたのもそのころのことである。

しかし私が本当に真剣になって英語の勉強を始めたのは、なんといってもキリスト教の聖書にめぐりあってからである。戦後の混乱の中で、いかに生きべきかを摸索しているときに、この偉大な書物に出会った私は、なんとしてでもこれを勉強したいと思った。そして聖書の勉強のためには、少なくとも英語だけは読めるようにならなければならないと考えた。今から思えば実に迷信じみているが、私には英語がほとんど“聖なる言語”のように思えたのである。ときどき人から“どうやって英語を勉強したのか”と聞かれるが、そういうわけで私の勉強は“どうやって”などと言えるような組織だったものでもなければ、そもそも方法などと悠長なことを考える余裕はなかった。ただ目と口と手のすべてを使って、英訳聖書と聖書に関する本を少しでも多く読む、というだけのガムシラな勉強であった。だから私の英語の教科書は Authorized

Version であり、Hastings の Bible Dictionary であり、G. A. Smith の Historical Geography of the Bible、Oesterley and Robinson の History of Israel、Robertson and Davis の Greek Testament Grammar などというようなもので、私はそれらを声を出して読み、辞書を引き、大切なところは詳細なノートをとって勉強した。

聖書はふしぎな本である。人がひと度その中心的使信に触れると、同時にそれは人の知的関心を喚起してやまない。そこには“知恵と知識との宝が、いっさい隠されている”。私もまた聖書に触発されて、ギリシヤ語やヘブライ語をかじり、聖書の地理や歴史をひもといた。そしてついには聖書こそ“わが大学”と思い定めて、いろいろな分野に向けてボツボツと自分なりの勉強を進めていくようになった。さいわい私の英語の教科書は、教科書というもののもつあの無味乾燥さとはおよそ無縁の、私の知的興味をいやがうえにも増すようなものばかりで、そのうえ知識以上のなにものかを必ず私に与えてくれた。随分ランボウな読み方をしていたにちがいないが、本の内容そのものに夢中になって英語のことは忘れてしまうようになったころには、辞書を引きさえすれば、自分に必要な本はなんとか読めるようになっていたのであった。

人生の分岐点や挫折に遭遇したとき、どういうものか英語はいつも私の支えとなった。そしていつのまにか私は英語を教えることを職業とするようになった。教える立場になってみると、自分の英語の知識の杜撰さを思い知らされて、中学・高校の教科書や学校文法を一所懸命勉強した。気恥ずかしさをガマンして、日本人どうしても英語で話すように努め、たまたま発足した英検の1級をとったりして、“教える英語”の研修に励んだ。Yで働くようになると、ミシガンのオーラル・アプローチのおかげで、私は言語学にも興味をいだくようになった。なによりも英語という言語そのものを通して、私は広く言語とか文化の領域にまで自分の関心を広げ、深めていくことができた。実に英語

学習は私のすべての勉強の出発点であり、その基礎となったのである。そしていま私は、英語の専門でもない者が英語を教えることに忸怩たるものを覚えながらも、自分の少しばかりの経験が学生諸君の勉強になんらかの参考になることを期待しつつ、“教えることは習うこと”の楽しみを満喫している。

私共の学校には多くの優れた先生方がおられるが、英語国民の講師方は別として、特に留学その他で海外生活の長い先生方の英語を見聞きしていると、実に自然だなと感嘆させられる。それに比べると、私の英語はわれながら不自然でギゴチない。“凡人が苦勞して身につけた英語”という感じをぬぐいきれないのである。そしてこの私の英語のギゴちなさは、多分私の人生そのもののギゴちなさなのであろう。なにしろ以上申し述べたような次第で、私の英語は必要に迫られてやむをえず勉強した、その意味ではきわめて実際的なもので、いわば建て増しに建て増しを重ねてきた古家のようなものである。あまりスマートと言えないのもやむをえまい。しかしこれもまた一つの人生である。少なくとも当の本人にとっては、かけがえのない貴重な人生なのである。

いちど英語の勉強にすっかり失望してしまったことがあった。いくらやっても少しも上達しないことに、がっかりしてしまったのである。そのとき私を励ましてくれたのは、あるアメリカの文化人類学者の次の指摘であった。“言語の習得に知的能力の優劣はほとんど問題にならない。10年を単位としてみれば、頭のいい覚えの早い人も、頭の鈍い覚えの遅い人も結局は同じで、言語の習得そのものに大したちがいはない。”人生がそうであるように、言葉の勉強に適不適はない。他の学問はいざ知らず、語学だけは能力のいかんにかかわらず、誰でも努力しさえすれば必ずできるようになるのである。要は“急がずに、休まずに”（ゲーテ）コツコツと続けることだ。この言語学習の原則は、また人生の知恵であり、私の信じる宗教が“すべての人の福音”と呼ばれることとも軌を一にするもの

である。

言うまでもなく、英語の学習は英語の学習そのものに目的があるわけではない。技術を習得するようにいくら英語を勉強しても、英語がうまくなるわけではない。言葉はしよせん容器であり、大切なのはそれに盛る中味である。記号にすぎない言語によって、なにを伝達するかが重要なのである。かくして言葉の勉強は、けっきょく人間形成の問題であり、思想の涵養であり、人生の訓練そのものであると言える。人生とはなにか、人生いかに生きべきかを考えるとき、少なくとも私は、いつも英語の学習をその素材にしてこの難かしい問題ととりくんできた。その意味で、私にもし“私の英語”をうんぬんするようなおこがましいことが許されるならば、私は、私に学問の精神を教えてくれた恩師や、私の勉強を絶えず励ましてくれた多くの学友たちに対する満腔の感謝をこめて、へんな言い方だが、“私の英語”を“人生派の英語”と呼びたいと思うのである。

(所載) 「東京 YMCA 英語学校・校誌」

1971 年 12 月